

Musée Bernard Buffet



Buffet-Kun e-book vol.6

ベルナール・ビュフェをもっと好きになる月刊紙!!

月刊ビュフェくん

第6号
1950-
1954

ビュフェくん
+
南仏へ行く

荒涼とした
南仏……
(ぼくが描くと)



(フォリ・ド・ラ・クリティカ)

「キビ批評家賞」の受賞をきっかけに
パリで鮮烈なデビューを飾ったビュフェ。
1950年、サン＝ジュルマン＝デ＝フーレの狂騒を経て
パリの芸術家・文人たちは南仏へ移り住み始めます。



↑
ヒョカリ、ブリジット・バルドーなど。

作品「ナニス」(1951)より。荒涼とした南仏……と。

60年代目発行!! 舞臺はパリから南フランスへ……。

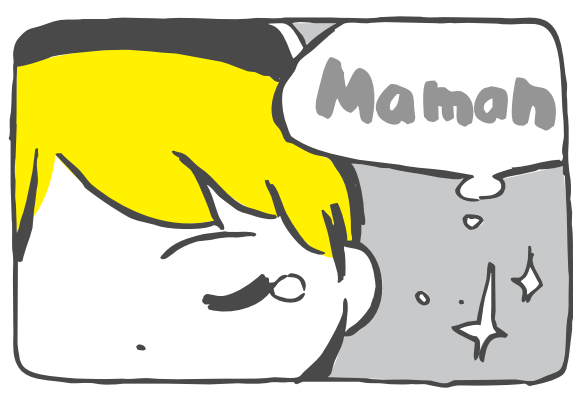
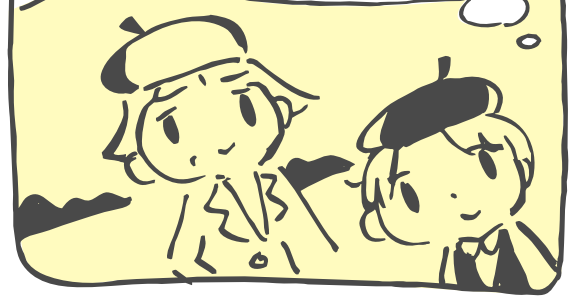
「ジュリエット・ブルジョワ」の「ジュリエット」は16歳から18歳までの年齢です。

ビュフェもまた
都市の喧騒から
逃げるように1950年、
南仏プロヴァンスの
小さな村「セギュレ」に
滞在。



そういえば
子どもの頃...

ママンと兄と
サン=カストで
休日過ごし
たっけ?



7月に離婚をしたビュフェは
11月、ピエール・バルジェとともに
南仏マリスに滞在。



ジャン・ジオノ。マリス在住。作品に「木を植えた男」他。

マリスは南仏プロヴァンス地方の小さな町。

後にブランド「イブ・サン・オーナン」の立ち上げに関わり、仏大統領とも友達。超カリ手！

ピエール・ベルジェは
ビュフェの親密な友人であり、
事実上のプロデューサー。
1958年まで
ビュフェを
サポートします。

わー!!

自然
いっぱい

だろ?

め

フフ...

我ながら
ナイスな
セッティング

君は君の
ままでいい
ビジネスは
私に任せろ

画家・作家志望だった
ベルジェは1948年から
パリ在住。書店員をやしながら
カミュ、ジャン・コクトー、アンドレ・ブルトン
らと交流。人脈を広げます。

ああ...
業界人だよ

悪い?

1949年に左翼新聞「La Patrie Mondiale」を
創刊したり、当時からゲイを公言したり、
3重に反骨心と
行動力に満ちた
人間でした。

ビュフェ
くん

二人で
夢見させ

1951年、ビュッフェは
南仏の「トランス」に
農場を借り、牧舎を
アトリエに改装。
大作の制作に挑みます。



あれ?! この鞭はもしかして...

代表作にして大作
「キリストの受難」
シリーズはここで
制作されました。

2.6 x 4.7メートルのキャンバス。



パリを離れ
ビュッフェは
新しい環境で
歴史に残る
名作を
描き終わりました。

傑作
できた!!

宗教画という大テーマ、
制作環境も含め、
ベルジエのプロデュースも
また完ぺきに
言えましょう。

ビュッフェくん
あの鞭
持ってます



トランスでの暮らしは1954年まで四年間続きました。

22歳のベルナール・ビュフェが都会の喧騒を避けるように訪れた、南仏プロヴァンス地方の小さな田舎町マヌリ。
そこで暮らす33歳年上の小説家 **ジャン・ジオノ** こそ、時代の寵児として若くして世に出たビュフェの、その後の人生、作風、作家としてのたたずまいに最も大きな影響を与えた人物がもしも。

**ジャン・ジオノとは
果たして
何者なのでしょう？**

平和主義者になるに
足るだけの勇気も
持ち合わせていないとき、
私たちは兵士になる。
平和主義者は
いつでも
いじりばっちである。

革命はどれもじつは
一トムの内面の
革命なのである。

1895年
マヌリ生まれ。
父は靴職人。16歳で金店に就職。
19歳で第二次世界大戦に出兵。文学への
興いは日々の中で消え、アンドレ・ジイドの
影響を受けて1929年『丘』で作家デビュー。
以降、マヌリを離れず創作を行う。
物質文明に対抗する運動「新しい村」を
実践。兵役を拒み逮捕。小説30作以上。
1970年マヌリで没。



Who's JEAN
ジャン・ジオノ



ビュフェ
ジオノの
共作による
挿絵本

『純粋の
土壌の
(1953)は
もとも1939年に禁
じられていた
ジオノの著書。

WWⅡ
ドイツ占領下
では決して
ドイツ系新聞に
原稿を書かない。



ビュフェの
作品

『女の顔』(1950)のモデルは
ジオノの娘らしい...

『木を植えた男』は
出版トラブルを経て
著作権を自ら放棄。

結果世界中で
読まれる
こと。



二度
でもへ

ここまでは
いらない。

Musée Fernand Buffet

の投獄。
こたえな。い。

母と父の出会った
サントカスト
Saint-Cast

イギリス海峡

2人だけで僕って
フランス全土を
楽しんでるなあ

都会も
田舎も

3つ越え
度だ...

あたしは
コリス川を
動かしてる

フランス

ビズフェ
出会った頃
55歳。
(1950)

都市は
素晴らしい。
しかし田舎を
美化したい。

ジオノ
先生!

いの
師匠!

出会った
頃 22歳。

地中海

Manosque
コリス川は
このあたり

アタベリと出会う
サントトロペ
Saint-Trope

都市と自然、ファシズムと自由、
人気と孤独、富と貧しさ...
相対する価値がある世界で
手とぐりて自己の表現を
つきつめていく姿勢は、
絵画と小説表現は違えど
ビズフェ、ジオノに共通するものです。

晩年にかけてのビズフェは、南仏トランピタルにて
創作に打ち込みますが、まさにジオノ的フランスの

実践でしょう。

ハロ人よ。君たちの世は、大樹が
街路を壊し、つるの蔓の重みがオベリスクや
エッフェル塔を押し曲げ、猪が地下金庫の穴から
飛び出す日がやってくる時、はじめて
訪れるのだ。(『長水みの孤独』より)

GIORNO?

は何者か?

要はガ4。
優れた作家。
思想家であり、
アタベリ。

ジオノによるビズフェ批評も

実に鋭く「人は君を時代の代弁者というが、関係ないよ」(意訳)
的なことを語っています。さ・ず・が...